

『金七十論私記』について

興 津 香 織

一 はじめに

日本において『金七十論』の注釈書が確認されるのは、『金七十論』が元禄十年（一六九七）に単行出版された後から二百年ほどの間のみであるが、今日まで『金七十論』の注釈書に関する研究はほとんど無く、これまで知られていた注釈書は数点であった。改めて行つた筆者の調査によって、散逸したものを含めて二十六点、作者は十七人に上ることが判明している⁽¹⁾。

本稿では、これまで目録上に名称が挙げられているのみで、未詳の書とされてきた林常快道（真言宗豊山派）による『金七十論私記』と思われる写本について、作者の問題も含め厳密に検討し、江戸時代における『金七十論』研究の全容を解明するための布石としたい。

二 快道における『金七十論』注釈書の位置付け

快道（一七五一―一八一〇）の著作は自身の宗派のものだけでなく、仏敎外の注釈書など多岐にわたっている。中でも『俱舎論』に対する注釈書が多く、他には因明や八転声や六合釈に関しても研究している。仏敎外の注釈書としては『金七十論藻鏡』（一巻）⁽²⁾、『金七十論疏』（二巻）、『金七十論私記』（二巻）、『金七十論高称記』（二巻）、『勝宗十句義論決択』（五巻）、『勝宗十句義論叢林』（二巻）、『勝宗十句義論聞書』（二巻）、『十句義論決択』（五巻）等があり、サーンキヤ派（『金七十論』だけでなくヴァイシェーシカ派の『勝宗十句義論』に対する注釈書も書かれている）。

快道の『俱舎論』に対する注釈書を見ると、本文に言及されたサーンキヤ説に注釈を施す際に『金七十論』の記述を使用している。それ以外にも『光記』等における誤った解釈を仏典のみならず『金七十論』といったインド哲学側の知識や

八転声や六合釈の知識を駆使して厳密に検討するのが彼の特徵である。⁽³⁾性相学において受け継がれてきた玄奘の理解するサーンキヤ説を、従来伝統的になされてきたようにそのまま踏襲するのではなく、真諦訳『金七十論』というおおもとのテキストにまで立ち返って理解を深めるべきであるという研究姿勢が『金七十論』研究へと発展していったのではないだろうか。

三 『金七十論私記』について

『金七十論私記』は龍谷大学所蔵の写本で、題箋に『金七^{ママ}頌因明合本』とあり、その文字の上に「二十五諦記」「藻鏡」「私記」と墨書されている。

この『金七頌因明合本』は『藻鏡』から始まり、『金七十論私記』（以下『私記』）と思われるもの、『金七十論頌』（『金七十論』の頌のみを集めたもの、以下『頌』）、『数論二十五諦略図』（以下『略図』）、『数論二十五諦記』（以下『二十五諦記』）を合本にしたもので、『藻鏡』と『略図』は快道の作とあるが、それ以外は作者が書かれていない。その中の『私記』には奥書⁽⁴⁾があり、明治十年（一八七七）に了諦という豊山の学僧が書写したとされる。『藻鏡』と『私記』は同じ字と判断できるので了諦の書写と考え、『略図』は了諦の字に近い。残りの『頌』と『二十五諦記』は了諦の字と異なっており、それ

ぞれ違う字体である。筆者の研究により、⁽⁵⁾『二十五諦記』は快道の著作ではないことが判明している。『二十五諦記』には作者や奥書などの情報は一切ないために、後世の人が内題の『数論二十五諦記 解俱舍光記』を見て豊山性相学の泰斗、快道の作と判断して合本にされた可能性はある。了諦については判然としないが、書写年代から考えてこの合本が成立したのは明治十年より後のこととしてよいのではないか。

四 『私記』の検討（1）——構成の特徴——

『私記』には題名も作者の記述もなく、『金七十論』の第一頌の引用から始まる。偈文および長行に注釈を施すスタイルである。一方、『藻鏡』は偈文等に対する注釈書ではなくサーンキヤ哲学と『金七十論』に関する概説を、仏典等に基づいて文献学的に検討している。快道が『藻鏡』で参照した、暁応嚴蔵（一七二四～一七八五）の『金七十論備考』（以下『備考』）や智幢法住（一七二三～一八〇〇）の『金七十論疏』（以下『疏』）は概説と注釈との二部構成となっており、香山宗朗（？～一七八八）の『金七十論解』⁽⁶⁾（以下『解』）は『金七十論』中の個々の言葉に注釈する形をとる。『私記』は第一頌から細かい部分にまで注釈を施しているが、残念なことに第三頌の手前でぶつりと途絶えている。一紙当たり十行、一行二十文字、全十六丁しか残っていない。

書写者の了諦が奥書において「快道師の私記」と記したことで、ひとまずこの十六丁を『私記』と見なすことは出来るが、この『私記』の前の部分にある『藻鏡』には題名と作者が明記されている。また『二十五諦記』も快道作と見なされ合本にされた可能性のある書であった。よって、この題名も作者も書かれていない『私記』なるものは快道の作と考えるよいのであろうか。以下、検討したい。

五 『私記』の検討（２）——快道『藻鏡』との類似点——

『藻鏡』は『備考』『疏』『解』を参照し、殆どの場合それらを批判しているのであるが、ここで興味深いのは、快道は『備考』と『解』についてはそのまま『備考』、『解』と記述するのに、法住の『疏』に言及する際には「有人」としか書かない点で、『私記』も同じなのである。実際にこの「有人」が法住かどうか、二箇所ほど検討しておく。

①『金七十論』第一頌の長行中に「外曰此婆羅門欲知從何因生」とある（巻上、大正藏第五四卷一二四五頁上段一八～一九行）。これは、迦毘羅（カピラ）尊者が盲闇に沈み込む世間を見て、阿修利（アースリ）という一婆羅門にサンキヤの教えを授ける事にしたが、そのためには三度の対話が必要であった。三度目にしてアースリに苦を退けるための原因を知

りたいという望みが生じたのはどうしてかという問いの部分に対する注釈である。快道はアースリに生じた「願欲心」を「発欲の因果」として説明する。

発欲ノ因果謂ク逼悩難^レ堪^ハ発^ス求^ル除^レ彼因^ヲ之^ノ心^上是^ハ逼悩^ヲ為^レ因而欲^ス
発ノ果生^ス（『私記』六丁表）

三苦に逼られるのが耐え難くなったので、その原因を取り除きたいという心が生ずる。この三苦に逼られることを（原）因となして、その結果として取り除きたい心（果）が生ずるのである、と快道は正しく解説し、次のように続ける。

解^初為^レ是^ハ備^ハ云^ハ何因生^レ苦甚^ハ妄陋^ヲ可^レ知^ハ有人^ハ問就^レ略^ヲ者亦^ハ謬^ヲ也^ハ
まず『解』の相当部分を見ると、

問阿修利ノ之欲知由何而生^ス下文云三苦^ニ所逼故^ニ生^ス於^ニ欲^ニ知^ニト為^レ滅^レ苦^ヲ因^ヲ（巻上、一丁裏）

と注釈されており、快道は「為是」として同様の見解とみなし批判していない。次に『備考』の相当部分を見ると、

言何因^一者謂内外天。何因生^レ苦^ハ（巻上、一〇八頁上段）

と注釈されており、快道は「甚妄陋可知」と痛烈に批判する。『備考』は、なぜアースリに欲知が生じたかという（原）因を問題にしている部分を（三）苦を生ずる（原）因についての話と誤って解釈しているのである。

次いで、問題の「有人」と目される法住の『疏』の相当部分は以下である。（巻上、二三五頁上段）

外問頌答如^レ次可^レ知。一部ノ頌末將^レ釈^二頌文^一。先拳^二外問^一。非^三別^二有^一人起^二此難問^一。下並准知^{セヨ}。於^レ中間辭頗略ナリ。

法住は『金七十論』では「外の問い」は誰か別の者が出てきて難問を言っているのではなく「頌に存する答え」を示すためにあえて提示されることがあるといい、問いの部分は略して構わないとして、注釈を施していないのである。この点が快道にとって「謬り」なのである。

②『金七十論』第二頌の長行中に「二退失者。如皮陀中説。無故而帝釈及阿修羅王。為時節所滅。時不可免故。是法若滅尽。施主從天退。故有退失義。」とある（巻上、一二四五頁中段二一～二四行）。これは伝承されてきた聖典類（ヴェーダ）にも苦を滅する方法があるが、それらも究極的かつ絶対的なものではないとされる。その理由の一つとして、インドラ等の神々であつても、時節（ユガ期の終末）により滅せられ、施主も功德が尽きれば天より退くという、ヴェーダにおける「退失」が挙げられている部分である。快道はインドラ等の神々が時節という時の影響を免れない問題とヴェーダにおける施主の祭祀での功德が尽きて天から退く問題とを区別した上で、次のように述べている。

是則時来^レ其^ノ因力尽^ク故能修^ノ施主亦退^ス——中略——解^四時至与^二福力尽^一——因^二トスル^ハ非也^一 有人所為天退故能為人亦退^ト者不^レ順^二是法^一言^二不^レ應^二滅尽^ノ語^一也（『私記』一六丁表）

『金七十論私記』について（興 津）

ここで快道は『解』及び「有人」の説を取り上げて批判している。『解』ではヴェーダの祭祀による功德の力によって天に留まる果報を「福尽果」と称して以下のように注釈している。（四丁裏）

一明^二為^レ時^ノ所^{コト}ヲ滅^二二明^二福尽果滅^一——中略——因^二是^ノ施力^一生^二天上等^一然^モ施福尽^レハ則復退落^ス有^二此^二二失^一故^二非^二滅^一苦^一因^一『解』が時の影響と功德の力が尽きる事を同等に扱う点に、快道は異議を唱えているのである。

「有人」と目される法住の『疏』には以下のようにある。
退失ノ証ノ中所^レ祠諸天為^二壊空等^一時節^一被^レ滅。故能祠ノ人自有^二退失^一。如^二樹若伐^レハ則影随滅^一。（巻上、二三七頁上段）

法住は、樹木を伐採すれば、それに付随する木の陰も同時に滅するという譬えを用いて、祀っている天（の神々）が時節により滅せられれば、それを祀っている人間もまた同時に滅するという持論を展開している。それに対して快道は法に順つておらず、法住の主張は滅尽という言葉に相当しないと批判している。

また「有人」についての他に、『私記』における特徴として、『金七十論』の本文について宋・元・明の三本のみならず、高麗本を参照して検討している点が挙げられる。『備考』や『疏』、『解』では、ほとんど言及されて来なかった問題であり、『俱舍論』の注釈書と同様、快道の厳密な検討の姿勢が

窺える。

六 おわりに

以上、『金七十論私記』とその作者に関して検討し、構成や内容の特徴について見てきた。本稿では、紙数等の制約もあり『私記』の部分的な検討に留まったが、この『私記』は快道によるものと考えて良いだろう。

『私記』の全体が残されていない事は残念であるが、初期の『金七十論』注釈書における共通的な知識や理解の変遷等を明らかにする一助とはなるであろう。サンスクリット語文献を直接検討できる現代において、江戸期のこういった研究はすでに無用と断定することは簡単であるが、ただ忘れ去るのではなく、これらの研究をどのように捉え評価していくのか、現代の我々だからこそ、それが求められていると考える。

1 江戸時代における『金七十論』研究の概要については、拙稿「日本における『金七十論』とその注釈書について」（『仙石山論集』第二号、二〇〇五年九月、三一―六〇頁）を参照。

2 『藻鏡』については、拙稿「日本における『金七十論』の注釈書——快道撰『金七十論藻鏡』を中心に——」（『印度学仏教学研究』第五四卷第二号、二〇〇六年三月、五七二―五七五頁）を参照。また写本に関する情報（書写年代や所蔵等）は前

掲拙稿を参照。

3 快道の『俱舍論』注釈書における記述については、拙稿「『俱舍論』におけるサーンキヤ説解釈の変遷」（『國學院大學紀要』第四八号、二〇一〇年二月、一八一―二一〇頁）を参照。

4 已上快道師私記惜哉已下不全義而還本家給也／于時明治十年二月快師以置書写得者也／豊山留学釈沙門了諦書。

5 『数論二十五諦記』についての詳細な検討は、拙稿「『数論二十五諦記』について」（『仙石山論集』第四号、二〇〇八年十一月、一―一五四頁）を参照。『数論二十五諦記』は正式には『数論二十五諦記解俱舍光記』という題名であり、写本の形で二本現存するのみで、龍谷大学（今回取り上げる合本）と東北大学に所蔵されている。一連の研究により、智山派の道空（一六六―一七五）『俱舍論光記講義』（『智山全書』第十三卷所収）第三卷におけるサーンキヤ説についての注釈の部分を抜粋・加筆し、『数論二十五諦記』という新たなタイトルをつけた独立の書に作り替えられたものであることが判明した。

6 『備考』・『疏』は『日本大藏經』（増補改訂）第五八卷「金七十論章疏」（一九七五年）所収本を、『解』は安永二年刊本を使用した。

〈キーワード〉『金七十論』、『金七十論私記』、『金七十論藻鏡』、

快道、サーンキヤ

（國學院大學非常勤講師・博士（文学））